翻刻・麦水俳諧春帖四種

――『春濃夜』・『三津祢』・『大盞曲』・逸題春帖――

田中道雄

（一九八〇年十月十五日受理）

蕉門中興運動の中で特異の位置を占める堀麦水（享保三―天明三　一七一八―一七八三）は、明和七年（一七七〇）ごろから、『虚栗』調のいわゆる貞享正風を主張した。これに応じた新風作品は安永六年（一七七七）刊の『新虚栗』に集成されるが、それ以前においても公刊されぬではなかった。すなわち、ここに紹介する『春濃夜』・『三津祢』・『大盞曲』・逸題春帖の四点の春帖がそれで、麦水の編により、明和七年・同八年・同九（安永元）年・安永二年と例年刊行されている。その内容は、『新虚栗』以前の作風展開を知る必須の資料と言うべく（かなり多くが『新虚栗』に再録されるのも注意される）、中興運動理解のためにも極めて興味深いものがある。因みに記せば、麦水の春帖としては他に明和二年刊の『年またき』があり（『加能俳諧史』に「ひかしかせ」として掲げるもの）、既に古市駿一氏によって翻刻されている（『義仲寺』誌一五四・一五五号）。新旧の春帖は、その比較対照を通し、我々の麦水研究に多くを資するであろう。今四点を一括して翻刻するが、別稿を予定しているので、解説は書誌的事項に限ることにする。

『春濃夜』・『三津祢』・『大盞曲』は富山県高岡市蔵尚之（俳号巨水）氏蔵、逸題春帖は金沢市立図書館蔵、いずれも他の伝存を全く聞かない。装本・版面は地方版であることを思わせ（金沢版か）、孤本で伝わるのもかかる理由によるのであろう。中興運動研究上、まことにもって貴重な四点と言える。次に各書ごとに記す。板下筆者はすべて麦水。

『春濃夜』

半紙本一冊。全一六丁。柱刻、「一」～「十六」。表紙、褐色。題簽、中央無辺、薄褐色、「春濃夜　加賀」、「加賀」の左下部に「庚寅」と細字で墨書する。二竹の跋あり。序・奥書・刊記なし。蔵尚之氏蔵。

『三津祢』

半紙本一冊。全一五丁。柱刻、「一」～「十五」（十二丁目は「十三」と誤刻、「十三」が二回になる）。表紙、卵色。題簽、中央無辺、薄褐色、「三津祢　」、書名の下部に「辛卯春興　加賀金沢」と細字で墨書する。石叢散人の跋あり。序・奥書・刊記なし。蔵尚之氏蔵。

『大盞曲』

半紙本一冊。全一七丁。柱刻、「一」～「十七」。表紙、薄茶色。題簽、中央無辺、薄褐色、「大盞曲　加賀　全」、「加賀」の左下部に「壬辰春興」と細字で墨書する。「明和壬辰之春　金城」の奥書あり。序・跋・刊記なし。蔵尚之氏蔵。

逸題春帖

半紙本一冊。本文一六丁、初頭に遊紙一丁あり。柱刻、「一」～「十六」。表紙、卵色。題簽は、表紙中央に剝落痕あって、今これを逸す。代りに左肩に白紙を貼付して、子持枠の中に「麦水歳旦帖」と墨書する。序・跋・刊記なし。巻頭に「癸巳春初……」、巻尾に「樗庵社中」と記す。金沢市立図書館蔵。函架番号、K九―一〇七、貴重書。

以上の通りであるが、いずれも質素な小冊であることが察せられよう。中央俳人の出句を見ず、外見内容ともに地方俳書の色彩が濃い。

なおここで、刊行年の決定について贅言を付しておく。『大盞曲』と逸題春帖は、版面に記された年次「明和壬辰」「癸巳」によって、それぞれ明和九（安永元）年・安永二年であることが確認できる。これに対し『春濃夜』と『三津祢』に記された年次は、後人の手で表紙に「庚寅」「辛卯」と墨書されたものにすぎない。だが、この補記は信頼おけるものらしく、『加能俳諧史』（大河良一著）も『春濃夜』を明和七年、『三津祢』を同八年として疑っていない。また、『春濃夜』・『三津祢』・『大盞曲』の表紙の右下端に、それぞれ「一」「二」「三」と墨書するのも、所蔵者のかかる認識を示すものであろう。しかしこの二つの年次「庚寅」「辛卯」は、二書の刊行年としてそのまま承認してよいものであろうか。内部徴証による裏付けを欠くのは、やはり気になるところである。

解決の手がかりを、『春濃夜』所掲の後川の句に求めることができる。文通の部の冒頭に、

島山や雲雀鳴越すおちの里　行脚　後川

と見えるが、この「行脚」の肩書は、『加能俳諧史』も指摘するように、明和七年から翌八年にかけての上方滞在を意味するものと思われる。ところでこの句は、後川の行脚記念集『梅の草帋』（明和八年刊）にも収まり、その中での配列――明和七年作らしい四季発句二〇句中の第四句――を根拠として、上方に旅立った明和七年春の作と推定できるのである。金沢出発は同年の一月末・二月初ごろの早春であったから、旅中の書信に託された本作が、同年春刊行の麦水春帖に逸早く収録された、と考えることも充分許されるだろう。これによって、『春濃夜』の刊年は明和七年と確認できることになる。残る『三津祢』の場合は簡単である。同書の跋は『春濃夜』の跋と内容的に関連を持ち、『三津祢』は『春濃夜』の翌年の刊行と考えねばならない。そうすると『三津祢』の刊年は明和八年ということになり、『春濃夜』・『三津祢』のいずれも、その表紙の補記「庚寅」「辛卯」を信頼してよいことになる。

凡　例

一、漢字は、新字体・正字体など通用のものに改めた。明らかな誤字はこれを正した。振仮名・濁点は原本通りである。

二、長文の前書や跋においては、原本の改行を無視した。またこの場合は私に句読点を施した。

三、細字で示された送り仮名や助詞は、片仮名の場合に限って細字のままとした。

四、一句中の分かち書き、部分的な左右への片寄せ、散らし書き様の

行換えは、これを再現し得なかった。

五、一書ごとに一連の句番号を与え、付句はゴシック体で示した。

貴重な架蔵書の翻刻をお許し下さった蔵尚之氏・金沢市立図書館当局に対し、深甚の謝意を捧げる。また解読に際しお助け下さった大内初夫氏に、厚く御礼申し上げる。

一『春濃夜』

春濃夜　加賀〔庚寅〕

」表紙

」見返し

犀川之夜

1 桜うぐひ風情過しそ味噌あへん　樗庵

2 春ー月扇ー開キ興しき　有貢

3 馬ー術哉こやかけろへる逸（イチハヤク）　楚江

4 二ー丁ー余遠ク椋ー原の隈（クマ）　我橋

5 わたり種十五六本生（フイ）てげり　左貞

6 日のしく〳〵の地に胡（アグラ）ー坐かき　二竹」一

7 ウ涙ー呑ミ郭ー公の声胆（キモ）にしむ　其筵

8 三（ミ）ー十（ソ）とせ髪の束ネ朽へき　素椿

9 水ー壁（カベ）を侵（ヲカ）して火ー消打ー烟リ　三枝

10 圏（フリ）の麓（クシロ）の鉗を求む暮　市川

11 秋の月白ー銀叩クあたりにて　市燕

12 菊ー花千ー斤売得たる也　社藤

13 風さくる褞ー袍寒ク法ー聞かん　有貢」ウ

14 輝（アカ）いたく和（ワ）ー爾（ニ）の冬され　樗庵

15 別ル雷加（カミ）茂のはつ詣テ急キけり　二竹

16 花優（ユウラク）ー楽に再（マタ）ー従（イト）ー子（コ）つれ　楚江

17 生（イキ）ー鱒に理ー窟詩ー作る椽（エン）ー端や　我橋

18 日の入すごくさゝ濁る浪　左貞

19 二（マン）幔をあけて碇めす声哀きく　市川

20 おのれをつかミ息ー白クつき　其筵」二

21 三（マルカホ）ー平や美ー人のなやむ姿ー見て　素椿

22 東ー呉此ノ夕へ心ー憂（ウキ）風　三枝

23 浜ひさぎ久しく乾さぬ手織布　社藤

24 箕にいたゝきし餼（カマツカ）の鳴ク　市燕

25 穴ー門に童を叱リ連し月　楚江

26 頓ー写の半ハ満しをそ聞　二竹

27 あさもよゐ紀ー州根ー来の椀家具に　左貞」ウ

28 酒ー乞ありく中風上戸の　我橋

29 茶返しに汗して羽織皺（シハ）びつゝ　其筵

30 石山寺の板のうへかな　有貢

31 世の中ハ小ー便小ー舟なきさ漕ク　三枝

32 雲ー助弐百銭ー持し富　市川

33 誤れるむかしを忘れ或ハおもひ　市燕

34 尾ー上の径（コミチ）ー路琵ー琶馬ー上にて　社藤」三

35 晦（ミソカ）ー日花なし若葉の嵐ほの細ク　樗庵

36 樗庵窓のもと各春を送ル　素椿

各春興

37 暮乙ー鳥かゝやく西ー楼側（カタシダチ）　蝶化

38 不レ知ラ他ー生すミか同しき燕我　南草
39 春の水寒し獺（ラン）ー鳴ク小ー家の灯　布阝
40 白ー椿白ー日鶯声ー闌し　八目」ウ
41 飼し蛙小庭の石になやミ腹　斗入

ゝ

42 漁ー夫富し春の浦ー半の薄ー曇リ　未醒
43 雨ー晴にけり梨ー花我ー姿うつゝなき　牛後改　眉彭
44 吹や岡鼠根つとふ野大根　ノ卿
45 春の夜をうつの山辺に寝たき哉　一笙
46 幾夜待いく夜蛙のつらく声　北虹」四

春　唸

47 雲ー間山桜にほそむ眼哉　素連
48 春の夜やくらきともなき六日空　十廾
49 衣を飾リ弥ー生不ー性と成ル身世は　女成
50 此花のいつこ清香ふッき哉　小々雄
51 鶯の来てよしつけき柳かな　女左柳

仝　」ウ

52 かけろふや遠近の風馬の骨　度五
53 如月や尉めつらくも一里出し　谷阿
54 見ー渡すや花の峠に日そ暮し　花仙
55 山照るや流ー路春の水ならん　多升
56 有ー合ヒぬ旅路吹風己か梅　十和房
57 幾世経し身や悔ミなん谷ー桜　如笛房
58 藤の花くぞ鮒狩らん山ー根川　亀芝」五

春　詠

59 玉くしけ人にあかさす花待し　可耕

60 ひとりおし柳吹降夕けしき　一水
61 田螺ひらい泥足おのこ岡の月　渡雪
62 花ハ夕へあしたに鳥のおもほへぬ　鴉丸
63 山鳥よ椿もろくし尾の長キ　諸三
64 雁何ン里声痩つらめ灘ー渡リ　竹為」ウ
65 江ハ江にして鷺水深し根白草　芦水
66 梅白し霞老せじ鳥よ鳴ケ　把木
67 うしろめたく花やうとミん春の雨　女ひさ
68 賤ハ楽し深ー山なる花月に見ん　魚静
69 春霜に朝顔蒔む兒三人　石牙

ゝ

70 はつ花や妖怪とまる北小路　二竹」六
71 春されや艾かもとの木瓜の花　里曲
72 世や真ー昼南ー面の胡蝶空青し　李洗
73 花咲ぬやはいと吹そ弥生嵐　驢橋
74 さりにしや枕における春の月　一鴻
75 鶯来鳴窓のむら竹朝戸出　兎扃

宮古の途より

76 行春を馬ー渡り川に衣干さん　雛甲」ウ

ゝ

77 夕鶯立てミ居てミ君来なん　尼暫夢
78 梨子の花殿守ル人に心かたり　女歌風
79 麻衣着あやし男の桜かさし　仝ゑ舞
80 花を思ふ目にもとかしき霞哉　仝芋囿
81 朧月おほろに人を我や見き　雨常
82 花ちりぬ詣テうすミつ人心　里夕」七

83 梅咲や及こしなる水鏡　烏暁
84 つゝし蹈てうはそくの宮訪ハん　奥井

仝

85 はつ蝶や骨折飛ぬ麦二寸　如意里
86 日のくれや親仁酒呑桃の下　曲々斎
87 朝霞長ケ七間の岩赤キ　野草
88 権現の赤松原や若ミとり　峨水」ウ
89 片日さす谷間のわらひ太キ哉　丁々
90 のら猫の薫(カザ)かき廻る蕨哉　虚堂
91 おもしろや鴉羽たゝく春の水　不仏
92 花の中行や近江の伊勢参リ　馬蘭
93 陽炎や荻のやけ原に立し僧　曽呂
94 行船や桜ちりこむ山あらし　雅山
95 春かせや柴胡か原の石仏　夜不閑」八

春興

安江秀雪庵社中

96 行あたり弱けに落る夜の虹　流光
97 落し角を詠居にけり春の鹿　茂竹
98 散まゝに朽(クチ)ぬる谷の椿哉　遅回
99 霞立麓は近し鶏の声　漁布
100 町の川船さしのぼる雪消哉　暮漣
101 一尺の独活と成けり山桜　蛙三」ウ
102 山ふきや妹かき分て衣そゝき　樗木
103 田をかへす土一間のハゼや溜一水　氷青
104 人あしの立て深山のさくら哉　旦住
105 舟とめて野中の柳見居にけり　里塔
106 人憎し桜一焚ク人谷の家　素人
107 かけろふやさせもか露の朝日影　帰鳥

仝

」九
108 川船や散花を積朝あらし　混夫
109 遅さくら翁は山に夕日影　婦人 清嵐
110 老ぬれハ海雲取身のつたなさよ　卯圭
111 馬鳴や侍町の辛夷花　廬峰

春吟

112 けふなくハ異(コト)一花に桃やけをされん　江都在府 浦秋
113 汐干から小一魚つなき来ル日くれ哉　仝 東以」ウ
114 春の野を惜けに人の歩ム哉　仝 杜橘

仝

115 日や入らん灘の汐干の満見へし　柴扉
116 予ハ綾を重ねて寒ししゝミ取　柳翠
117 人や見し然はかり花の散行かハ　八橋水
118 鍛冶町の鍛冶屋か店にひはり鳴　白眼子
119 身やうかり商人多く残る花　蓬臥」十
120 淡雪に梅のあちらのけしき哉　雨声
121 哀さやなぎ焼山の雉子の声　霞亭
122 燕たつや柳のもとに僧一人　柳鞠
123 桜見る人か山路に彳て　枝山
124 原中や馬も繋がて臥柳　有声

〃

125 背子や来る門田の蛙声一止ぬ　一舟」ウ
126 苗代や代官ゑめる朝なく　一帆
127 花の陰いつれ後(コタチ)一達の目くるおし　蘇平

128 独活苅の皺肌薄し鞍馬道　百壺
129 はつ桜聞し今宵やひましらへ　桃市
130 片山や梅か香のゆふへ猿の鳴　里山
131 花にいさと云フ人もなし旅の宿ハ　やさと
132 是非もなや蜂の巣なくる竿二間　呉夕」十一
133 うらなくも梅咲野路の日和哉　夏候
134 海棠や廓にぽつと午時の鐘　凡虫
135 駒いほふ春よ夢さめ起立ん　一瓢

〻

136 花や世人此あだものに迷イけん　素椿
137 へつらはぬや妹として世を田にし取　有貢
138 桃咲や煮木綿干し女の美なる　左貞」ウ
139 子を得てハ蓬莱飾るおろか哉　市川
140 早蕨に下リ立杣のきをい哉　露友
141 南ー都なには世ハさま〳〵に花や咲　社藤
142 朧月亭ー子の院を下リ来けり　其筵
143 花の光リ宮女扇に写しなむ　三枝
144 業にくれ花咲けると人に聞ぬ　市燕
145 都より三ー十ー日なぐれて越の花　楚江」十二
146 桃ちる日胡ー弓猿ー唄入ましり　我橋

文　通

147 島山や雲雀鳴越すおちの里　行脚　後川
148 科てるや春の海辺を君見ませ　本吉　亀選
149 寝さめよき春の寒ミや夜半過　福富　毘石
150 花を見るよたれにたかる小虫哉　仝　麦司」ウ

151 この花に何の遺ー恨そ南ー風　〻　馬三
152 木草芽たちおのれ何せん春の色　柏野　其葉
153 春の日の水田にあさる鷗哉　〻　河巣
154 薬ー堀春ハうとめや売に出ん　〻　麦風
155 清キ日や白魚浮かハ妙ならん　水島　川芦
156 不性さや蛙追んと手の真似し　ミナト　和佼
157 長閑さは夜にこそあめれ朧月　野々市　宇洪」十三
158 長ー堤いつち鳥なく朝霞　宮腰　琴市
159 春の暮鯛うる声そはげしけれ　松任　白鳥

〻

160 坂七歩上リて右やふきのとう　那谷連中　蘇月
161 ちる花に世を観し居る若衆哉　姿仙
162 敷島の姿をうとふ田にしかも　魚好
163 人日影に身を撫おもふ菫原　池水」ウ
164 あすならハ草と見捨ん若菜摘　和文

〻

165 畑打や投し土ー器投ー出し　山中連中　祖明
166 蝶追へハ畑ー打親の呼し哉　祖竹坊
167 賤の子か雛の数よむ寝覚哉　芦遊
168 わらひ取やけふハ此山明日いつこ　祖菊
169 爰かしこ防風を踏し防風取　南甫」十四
170 小雨にも桜見返る夜ルの風　梅枝
171 夜もすから雁帰る声明なんか　三紫
172 売あまる田螺や一夜籠に鳴　麦川

〃

173 頰白鳴岡に髪結ふ日より哉　大聖寺連中
174 乙鳥や堅田中道里はつれ　八水
175 暖や小山端やまの柴の上　夫由
176 花散ッて僧正山を下リけり　加水」ウ
177 山さくら膝立直す野鍛冶哉　柳下
〃　紫狐

178 よし札ハなくとも桜折し科　津幡　観之
179 鳥の巣を見よとて親の指図哉　今浜　見推
180 鶯の夜明のけしきつよき哉　戸出　康工
181 春の野を籠(コ)につむ賤のけしき哉　高岡　馬丈」十五
182 立よらん妹か垣根の梅しろき　福井　小瓜
183 春の野ハ人もさま〳〵のすかた哉　氷見　馬十
184 はる雨ハ腹のふくれて寝る夜哉　魚津　蘭夫
〃

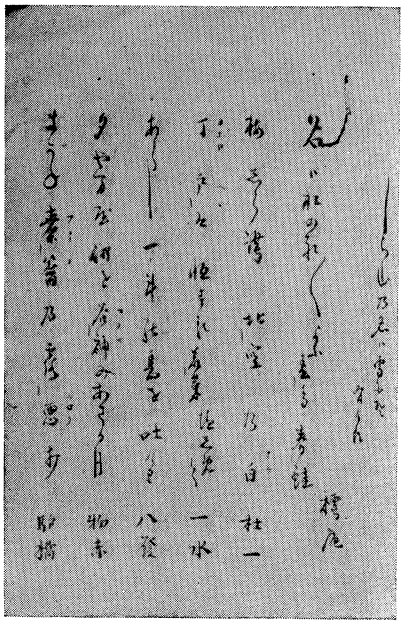
185 夕雲雀己にこたわる鴉哉　七尾算簷堂　太見
186 若草の骨秋草の哀見る　南路
187 桃咲や命婦預る裏の鍵　百爾」ウ
〃

188 うくひすや花ハ冬より赤椿　越後高田　泰亀
189 上へ童桜手折て泣出しぬ　既戈
190 先ッ梅与世ハさま〳〵の病なる　左弓
191 野一等遠クあけほの〳〵し春の色　早川　巴東
192 あけほの〳〵わらひ折喰ハん東一阜(ヲカ)　合浦　魚曰
」十六

或人樗庵主ニ問テ曰、此俳一風奈一何ン。庵主曰、是蕉翁貞享中の句一風直チに清意味を述べきの道也。又一曰、我ニ四箇の大言あり、連歌盗一人、歌うそつき、下一作誹諧、似セ詩人、諸一流無一風一雅、蕉一門独風流。問一者大に驚ク。予傍に聞キ、竊ニ感服して爰に記ス。

二　竹

」ウ



『三津祢』本文巻頭

二『三津祢』

三津祢〔辛卯春興 加賀金沢〕」表紙

しら山の名ハ雪にそ
有ける」見返し

1 名ハおのれ〳〵よふ春―鳥春―蛙　樗庵
2 梅しら袴北―空の白　杜一
3 丁戸―々恒する若―菜塩しめて　一水
4 あらし一―斗の息を吐けり　八発
5 夕やまや何を谷―神のあざる月　物赤
6 まがね橐―籥の露―悪打　驢橋」一
7 ウ院して秋の友がきの下―輩　立匊
8 前―垂かづく星のむら雨　丙穴
9 恋にこそ卯―坂のけふをはつかしミ　涅町
10 言の斐ひく幻を斬　芻路
11 白―昼の世に自を沽―果ッ　諸三
12 正に孕ル馬もどる声　平業
13 うしろなる岡の接―骨―木雨降れり　度五」ウ
14 命たゝへて甕抱ク月　一鴻
15 かゝる秋休又六をうたはんや　里笑
16 一―顆の木―槿白ざくれたり　魚静
17 身―進ミし夕―部ハ花の姿かハ　可耕
18 弾―正眉を行雁に棄ッ　樗庵
19 二おほろ気や錦―嚢扣ク灘わたり　杜一
20 佐―渡の役―場の闇を買―夏　諸三」二
21 撫―子に小キ腹を吟―行し　驢橋
22 人おもほへす衣七―日なる　可耕
23 ひたふるにして神―戸―代の曙や　魚静
24 声ほろ晴し諸―鶴の天　度五
25 たはれ雄に盗まれ君の酔―催イ　蝶化
26 丹―波の府―生やよ美―目狂ふ　立匊
27 魔―嵐与佃の粟の吹―折レて　平業」ウ
28 百里八―重雲船あげッ西　一水
29 外―戚―甥に逢ふ夜月けに水の流　芻路
30 白―牛奇―也導ける寺　涅町
31 ウたのめつゝけふを土―苴の所―業より　魚静
32 そほちふる雪毛―脛埋ミ　八発
33 中―々に尾―張大根風―渡る　一鴻
34 昔―時芭―蕉春―宵の文ン　丙穴」三
35 道古―人なし花俗―談を匡へき　物赤
36 猿永―日の朝―暮争ふ　南草

春興

37 かき曇る春雨―鳥の浦訪ハん　汝麦
38 松青し志賀の三月嵐寝む　如芳
39 帳―深シ暮や雉子の色に舞　一阜」ウ

仝

40 生―死ふだん人―間しらず花の山　混夫
41 花―重し三ッ輪くミてし人いかに　清嵐
42 笠―提ていさゝ小川や田螺とり　卯圭
43 はるさめやしつけきかたに児ふたり　花山
44 老―尼二人しのふ顔なるハ枸杞や摘　北燕
45 誰ソや踏淡―雪が上の薄月夜　呉夕」四

ゝ

46 夕―朧こハ衣うつ小家哉　梢波
47 悔しきハ奥に花ある流かな　子中
48 寄―鯉や芽芦のゆふへ波立し　三翠

49 命得て立や旅雁の夜半過し　絮翠
50 桜焼ィて山に招かさる客三―人　霞亭
51 春雨やいと物すこし昭―陽―殿　梅嶺下「兎口」ウ

春興

52 古草に予も年ひとつ老て逢ぬ　浦秋
53 花に布子世をかろんする君ハ誰ソ　巨卯
54 老よ掘ル薺にいつの富得しな　其夕
55 しら魚や凍氷ハ薄し磧礫　歌曲
56 幾―遮リ梅花したゝる雨の后　岱阝
57 白―浜や春の衝の声の色　白虹」五

仝

58 痾を起し春―台仰クかすミ中　五百庵　馬骨
59 牛口よ春意ハ学ひ尽せとも　山園舎　芦川
60 春雨やひやくし草の先ッ生リ　芦敷
61 黄昏や春を目か積ム木々の雨　一哢
62 蔦木の芽に思案顔也くれの雨　梨京
63 屋―潤ヒ後―指さゝず梅の花　意斎」ウ

おなしく

64 蝶や飛花一時の夢かろし　女玉英
65 年を得て又老し松の花の春　梅尾
66 春日とて葛の手縄の節―立ぬ　雨声
67 世や桜さくら吹越ス我あわれ　女歌風
68 君や待夕かた設ク春のなかめ　ゝゑ舞
69 梅か香に我かも迷ふ心浅し　尼暫夢」六

仝

他ハ皆濁レリ

70 略目―知ル花や沫吐ク若奴　夏霜庵社中　丸々
71 星開ク柳の夜を撃美童　飄々
72 否や春南窓微―雨夢一―盞ン　子々
73 駒それて芳野や心ロ春の人　泥々
74 紫や妹か浮世を曙ケ小雪　垂々」ウ
75 燕―根の謳―歌春野辺笛□ン　楚々
76 梅夜月農か家うたゝ敲炉―中　青々

人に告テ曰、吾居は西溪の水に間まつて、然も西南の千家ハ樹間に来ル。

77 芽山薑や鳥―照焉に春―裳　区々
ゝ　」七
78 梅のはな知ル人をしてざればミん　十廾
79 春の鹿いつれ牝―牡の山見にき　小々雄
80 朧月ほのめきうとふ座頭ふたり　北文
81 いさゝ水朧―夜ふかく過行ぬ　廬峰

仝

82 むめ片枝おのれ呼朝呼おのれ　ノ卿
83 蜉蝣吹茶たつる音や桜降　白良」ウ
84 夕栄て燈人白し素羅の春　一艘
85 世を子の日己松葉をかく夕心　北虹
ゝ
86 はるの野や宮女捨身の世を持チ　一俵
87 春の浜胡児魚市し長とならむ　凡虫
ゝ
88 行春や廬を覗ク人誰有そ　舒子」八

89 柳―燕何事の因(イン)なりけるそ　酉水
90 日けさやか我世人の世若菜原　烏暁
おなしく
91 宵月や田螺に椿落しかば　如意里
92 原―霞菜種か岡や鶉飛　曽呂
93 野々垣に千重の椿おしけなく　丁々
94 日陰咲朝気つゝしの雫哉　虚堂」ウ
〃
95 心―無クけふハな花のはつ日哉　一楽
96 世は角の桜の姿なくし頃　里夕
〃
97 梅咲ぬ泥牛寒を送るへし　白猿洞　素椿
98 葩を啄(ハミ)―去ル雁の心せん　楚江
99 蜆―取ル子―等迅(トク)―過よ夕―附日　左貞」九
100 春の歌にいさ我沽らん朝あらし　社藤
101 紅梅に三日飯―焚野宮哉　市川
102 灘―嵐白魚汚レ妹侘ん　只仲
103 眩―業其人蝶の羽や折らむ　燕市
104 都とて雪の菜―摘メバそ菜つミ歌　三枝
105 神さぶる神の花―守花の春　我橋
106 眠へし咲藤かもとの素法師よ　有貢」ウ
〃
107 朧月鐘に夜を折ル山桜　烏明
108 鳥去ツて日―午の花の苦キ知ル　渡雪
109 泣けれハ叩ク春―花面白し　浣古
110 春の風黒―斜吹ク花薫ル　越鴻

111 花のやまうつゝなや誰ソよく見へて　東門
〃　」十
112 蜂に蜜蝶も何そか有ぬへし　郊外　里山
113 まゆすミの乙女はつ桜かさし来る　〃　奇畝
114 陽炎の陰に立―舞春―人―等　〃　鶯竹
〃
115 花桜酒名にしおふ貧最中　物赤
116 山浅ミ鐘数なへて長閑聞　里笑
117 春に雨そゝろよすかを妹待ん　立匊」ウ
118 春の色や背きる水ハ江の小(サヽナ)―魚　蝶化
〃
地―利不如人和
119 花なくて酒を進める女哉　南草
120 長―安鐘何に響かん春の霜　驢橋
121 春の雨憂ハ業なき身にあらん　一鴻
122 飛―鳥風翌(アスカ)日もこそ吹花折らハ　涅町」十一
春―色依―々
123 かばかりの願満(ミチ)てしさるに虻の鳴　丙穴
124 磯菜摘志賀のてこなのうら若ミ　芻路
春　嗇
125 夜を穿チ爵(シヤク)―清く梅の香を呑マむ　長天舎　一水
126 貪るや老の一歩を花の日よ　八発
127 明ぬれハ人の問ふ夜よ梅に暮　諸三」ウ
128 牛に聞春江の雨に捨る鞍　魚静
129 声巨(コ)―々(ラ)―等蛙追ふ昼野―路の雨　度五
130 是賓―女たんほゝ恒のけしき見舞　平業

131 日和けり白魚売の昼下リ　杜一
132 若ー菜乾ー菜吹や浅ー香の風なをき　可耕
追加
133 蕨とり南の阜に先つたふ　斗筲」十二
此頃聞へし
134 百千鳥化にふり行我すかた　所口 南路
135 君いかに手織あら衣賤か春　宮腰 琴市
136 鐘ひとつきゝす一声夕哉　野々市 宇洪
137 春の風誰蝶と生れ出にけん　松任 白烏
138 山霞昔ー時宿す寡を思ひ　〃 宜包
139 鎌倉の人に逢けり朧月　〃 可来」ウ
140 我花の客となる日ハたわけ哉　福富 昆石
141 春風や未癖つかぬ草なりし　土室 鼠白
142 はる雨の灯にしみ小窓哉　柏野 河巣
143 白玉の椿の花ハ桃にそへよ　〃 麦風
144 翌の若菜手寄の門田雁追ハん　水島 梅視
145 なりわひや木ー樵春山きそふ斧　〃 柳木
146 梅かゝや貧ー寺壁を貫かむ　〃 柳山」十三
147 偖ー春のこゝろやすさよ浦の住居　本吉 亀選
148 椋の木に鶯きゝぬ朝ほらけ　ミナト 和佼
149 黄鳥や地ー侍定りしこゑも哉　小松丹青下 為水
150 水常に岩に滴る山葵かな　無一斎 周好
151 うかりてし蝶立岡の朝日和　犁丁
152 疇に鳴ク田螺や風をいとふらん　三九
153 いかのほり眼のとゝく迄我ー春よ　工見」ウ
154 蛙鳴ク江を通ふ舟の忍ふ声　右之

155 睦月雲あした夕部に花やある　那谷 蘇月
156 花待し我けふも暮つゝ手を束　〃 姿仙
157 長生ハ痩たる独ー活にかきるかも　〃 魚好
158 世ー渡リといふ程あわれ小鮎釣　山中 祖竹坊
159 松原の雪落やミしゆふへ哉　〃 芦遊
160 我為に花ちる事を詠メけり　〃 三之」十四
161 山伏や東ー風わたる日の盆の葩ハ前セ　大聖寺 八水
162 落汐に白魚ひらく朝日哉　〃 友巴
163 さらほいし老ー骸カラ春に馴ー衣　〃 紫狐
164 いとゆふのするどき見ゆる日ー午川　水島 川芦
165 淡雪や雀なミ居る桃の枝　高岡 馬丈
166 海ー原江春の日ー脚のいとゝなる　〃 竜溟
167 垂ー柳法師か魂や残りなむ　滑川 貞雪」ウ
168 ひしき藻と老女答へて束ける　良明
169 梅ー見なむ難波の乞食友として　楽水
170 蛙聞て殆ント丸寝せし夜哉　魚津 蘭夫
171 うくひすや雀も似たる友なるか　高田 泰亀
172 冠すてゝ桜に明る鄙住居　行脚 桃也
173 桜尽て汝か帰雁我なミた　カナサハ 野曰
174 只さくら求メぬにこそ花ハあれ　〃 女成」十五

175 柳花常のミちのへ水清水　石叢散人」ウ

去春、四箇の話を聞て、怪て不レ旨。今春、無形のなるを見る、実に蕉門の出俗を知る。向上の一路、爰に伴いて行む。

三『大盞曲』

大盞曲　加賀（壬辰春興）　全

「表紙
「見返し

樗庵下の
風流をよみす

1 大ー盞の曲ク世をゆふ山の花呑む　猶穴
2 ちから遠ー志の芽に弱キ野や　樗庵
3 あるに臥朧よ烏ー皮の几　一阜
4 童か月にうすやうを乞フ　如芳
5 波ー巖横笛吹ん今そ秋　塢夕
6 蕎ー麦ふむ雌ー牛泡たれし跡　都々」一
7 はかなミつ孤ー城三十日のたゝれ雲　庵
8 暁妓を送る悲ー歌の灯　夕
9 おばり田のいたゞへむかふ恋舟に　穴
10 あらしいつこのさゝかにを引　阜
11 やとり木の色夏ー暮の枕する　芳
12 小笹かもとの児を呼けり　都
13 墨ー染の三ー年のほとを包かね　夕」ウ
14 失意試ム有ー明のかけ　穴
15 露ー現朝ー内遠の家ー鶏乱ル　夕
16 鹿を牽ー出す兀ー山の帝　穴
17 所ー以かすか去ー歳桜木の打侘ん　阜
18 春ー霜厚ミいきとおり泣ク　芳
19 二かけろへるかはたれ思ひ僧ー迷ふ　都
20 代を六ー原の素に起ー草し　庵」二
21 酒ー臭キうたゝ袖する市の中　夕
22 しのひ端ー戸に占あはれ聞　芳
23 斯やよし妹ー背を開ク君ハ誰ソ　穴
24 さゝれ松ー風潮ふかく消ユ　阜
25 湖ー上青し鎧につらく降雪よ　都
26 白ー髪ひそめ一ー星食クス　穴
27 はつ秋の月神めくミうた荷フ　芳」ウ
28 植ー込む栗に書ー扇を打ツ　都
29 ほの乾クそゝろ空ー蟬衣ー軽キ　阜
30 宮ー女のミやひ賜をかさる　芳
31 ウ燭ー化し良ー俤のさにぬりや　夕
32 狐ー貉昔ー年仇を吐ク息キ　穴
33 信濃なる雪ー解八重たつ花ー仄カ　阜
34 朝将よしな民若菜つむ　都」三
35 更ー富て茶ー気給ふ釜の春を鳴ル　芳
36 否きミか筆に庵春を鳴ル　庵

庵豈雅趣の
ためならんや

37 水古ー葉追ハれ雉ー子のやとり見よ　樗庵

其引

38 化ー花にあた物かたり申ス坊　攡月庵」ウ
39 むめか香の乞食袋に臥にける　如芳

40 浦花に竿―抛ル日そ酢はこばん　一阜
41 雨―便な花鳥の夢をいかにせん　塢夕
42 春―寒ミ祖―父独ハ世くれしな　都々

春興

43 朧月に我うたかはん梅の門　混夫
44 花の香のうしろねたるゝ春の雨　清嵐」四
45 はたれ雪木―株を掘や春の鹿　卯圭
46 女―御にや野芹を鳥にあたへける　荊山
47 東―風吹や岡の桧―原の末永し　北燕
48 朝日―和寄―居虫這―出しうつせ貝　廬峰

仝

49 花連―翹風許―々度の色もミつ　寒川
50 蜆―舟童―娼いとなめり　蘭江」ウ

春意

51 意をやすく世をや蛙と鳴侘む　素椿
52 おもひ声に足らてや雉子の羽をならし　東以
53 日うらゝか桑―麻説―合ふ髪―黄也　水石
54 鶯匂へり我レよき人に交りたき　其筵
55 春日永し妹あへ炊ク五合の飯　如白
56 熊追ッつめはつ日吹―出す息の筋　我橋」五

おなしく

57 春しる人歯―朶に腹十―市月　楚江
58 天―晴や花に面―着る我心　市川
59 君―召れそゝろ折戸に初三日月　社藤
60 春ねかひ常―煮茶―粥ふくまはや　三枝

61 嵐見る裳ソ世にしの蜊―焼ク　露筍
62 夕―雨けりあやしく嵯―峨に田―螺焚　呂宙」ウ
63 花に寛し人かゝる期を□へき　左貞
64 歌あやし霞分―入る山おのこ　ツルキ　其山
65 斧―音の間―遠に聞ゆ春日さす　ゝ　朱絃
66 花守らん伊賀わたらいに乞―問へよ　有貢

ゝ

67 待―侘ッけたし出見ん春夜―霜　女恵舞
68 東―風よ吹玉―江のいたり人しろし　仝　歌風」六

春趣

69 夢古ク被麗しけ彩―鴨　蒼梧
70 我―鬚の春を黒けよ杉すかた　為鈍
71 見ルや此一夜当千の春の恋　丸々
72 管笠やしのへ倭の梅鹿―角―菜　楚菊

ゝ

73 登ル日に春の生―駒やさへぬらん　在大坂　浦秋」ウ
74 春の雲みる目なの家に匂ヒ聞ク　巨卯
75 木―瓜ちるや石―売ル馬の夢を打　其夕
76 夕―花におのれ狭―莚なくりさし　霞亭
77 弋まバ星に恨と帰ル雁　絮翠
78 山さくらゆふへハ己かからころも　雨声
79 朧―夜や誰花―見ン人色―好ミ　白虹
80 山―葵掘て世―人の春を知るならめ　班車」七

仝

81 山―焼ク夜生―憎や月の照リ凄キ　十廾
82 やまふきの山に咲しそ哀なる　小々雄

83 世を屈ミ心雲―雀にゆたねけり　北虹
84 蜑―士の束ぬくゝたち青くみるめなき　野曰
85 石川を飛―行蛙ひとつ哉　在洛 呉夕
86 陽―炎にけふなき翌の鱈―引ン　一艘」ウ

〃

87 咲や此花ハ詩神の骨なるか　貴川
88 梅―白し語―貴門にもの申ス　烏暁
89 うらゝかや恵山の園に鳥よ鳴　秋雨
90 雉子端―山声色を吐ク日の出哉　市山
91 微―雨潤イ千―種起しな書に留む　越鴻
92 春や知ル予ハ春知らす寝ぬる哉　夢楽」八
93 蜆―取ル女やうき瀉の水寒ミ　寄北
94 雉子の声哀片田の夕あらし　来吾

〃

95 猿に花くらぶの山の雲―白し　布邑
96 怡―然たり田にしの春の小雨降ル　趙丈
97 良―春のうなひ子うとふ宵月―下　東門
98 花の雨青―氈雨―衣に帰ル哉　宮浦 琴市」ウ
99 霞なバかすめ我―寝ん春の山　長郊外 里山
100 落―合に舞フ花よとミ山あやし　〃 奇叡
101 陽炎やうき土の上に立―始し　〃 鶯竹
102 鶯の声泉水に響キけり　坐竹

仝

103 梅の月馬―山の坊に酢ハありや　凡虫
104 霞―退て有―形の翅冲今朝　一俵」九
105 帰らんの雁や世を経る身のすさひ　蕙敷

106 苗代に哀老女の身ぞふれん　一鷺
107 かくれじな鶯だにも朝―戸出に　湖狄

〃

108 山人の山布ころも春―嗅し　斗入
109 きのきそひ比良の根おろし雉子そ鳴　諸三
110 春の雁人を飽にハと思ふてふ　涅町」ウ
111 心―多ク世をこと業よ畑―打日　谷阿
112 細江鳴ク田―螺に己足りしなむ　芻路
113 独―斯桜うきとハかれし身か　兎菊
114 籮いかん何―生やけふ梅の水　浣古
115 糸ゆふておのつから澄ぬ心哉　貝水
116 寒しとて誰かうとミぬ春の山　如柳
117 春風や鳥羽に住ム人こゝろ憎し　布市 宇洪」十

〃

118 うくひすにめし喰ふて布子払ひけり　蝶化
119 徒さおのれ厭ん花の日よ　里笑
120 春の山人ハこちたく月に帰し　立菊
121 幣―猿によかりき人の春の面　杜乙
122 世や猟―人子を懐しミ雉子追ハん　梨京
123 白葩―煎の夕―辺そ雨を乞にける　山圃」ウ
124 強二于己一而忘レ夕ヲ求ム晨ヲ富て日を尽し沽かは虻の声　可耕
125 住―果ぬ身を心せん花の蹉跎　驢堯

彼安楽国土ハ知らす飽まて
食ひ日終酔吾―儕の
君子あらハ

又可レ親

126 この身世にひちてぬくめり栗の水　物赤」十一
127 いとふへき日をいとゆふの移リ舞イ　長天舎　一水
128 石（トカ）ー竜ー子（ケ）舞フ夕山辛キ日の阪（ヒナタ）　魚発
129 風流（ウカレ）見つゝ五十年のけふそやゝ朧　一鴻
130 発句何予に春ー宵九十日　丙穴
131 夜ルの梅あしたの鶴の睡る声　卓五
132 須叟の世の我須磨の浦蛙ー鳴　南草

」ウ

文のはしに聞ふ

133 君居らて柳徒（タヽ）さす庭の北　肥前長崎　奇頑
134 防ー風採（トル）ッて縣（アガタ）の僧を思ひけり　越前府中　之丸
135 祿（ロク）ー給（タブ）や居なりの家の桃の花　大聖寺　路長
136 雲ー蓋（ヲヽイ）し巌日（ヒ）ー負（ソムキ）さくら咲　友巴
137 さして物の足ル家にあらて野梅植ュ　紫孤

」十二

又きこふ

138 しら根吹白ー魚捕の哀さよ　仝　不尤
139 桧ー垣押て菫投ー越す隣哉　加水
140 狗杞藜押ー分見れハ仏守ル　柳下
141 星蛙傾ー里の宵を帰る夜や　八水

仝

142 ふミ所のなき若草や目におしき　山中　蘇月
143 村そ朧ねりかむ牛のすこき哉　祖竹」ウ
144 替リしハ痩て迄見る春の鹿　芦雄
145 梅の花椽の日ー南の餅破るゝ　祖明

仝

146 はつ若和布使の足の手柄哉　那谷　僧　桂芝
147 春の野や尉捨石に杖立し　〃　秀泉
148 彼岸桜我日に向ふにさハりなん　〃　如雲
149 華ー待し己か住家よほの闇キ　〃　一鳥」十三
150 頬ー白啼て陽炎のたつ真昼哉　曽丈
151 時ー得嘻し世にあれはこそ花の春　魚好
152 今朝端ー山霞か果の木の芽哉　姿仙

仝

153 洛陽やむめか香旧きねはん像　小松　松井
154 田ー面ならひ鴨の帰るなんけふ心　仝　三九
155 有ルか中に柳芽ー立て目たるき日　水門　和佼」ウ
156 山既にさそな曇らめ小鮎汲　本吉　素仁
157 春やたのし狗ー杞一ー銭のあたひのミ　蓬壺
158 磯ー霞釣一ー楽の人ー白し　歌汀
159 世や桜まほろし住ー家あしろ笠　水島　川芦
160 花の山其ー夜いびきの高キ哉　梅視
161 南ー黒く風や立ぬと梅折し　柏野　河巣
162 朝ー霞ほのかに薄きうない松　麦風」十四

〃

163 広庭を覆ふ柳そ姿よき　松任　露考
164 何に堪へて斯うかれぬるそ春の心　祖明
165 馬ー肥し背戸鞁（皷カ）ー草の盛リ哉　一方
166 我影を誰ー見て暮ん花の山　白烏
167 梅の花薮ハ日ー南の匂イ鳥　宜包
168 春の雪や和田酒ー盛の歩（ブ）にさゝれ　可来」ウ
169 春風や狐（キツ）追ふ鶏の哀ー鳴ク　雨巾

170 鳴かで雉子のはしるすゝろの薄―原　高岡　馬丈
171 雪に雨に若―菜売行やゆふへの日　把圭
172 はるの眠さめてし梅のあかくさき　汪由
〃
173 身口意の己うつゝな梅月夜　滑川　琭馬」十五
174 声ほのか苣―摘む妹か諷なん　康視
175 其もとにやおら牛―臥花―静カ　楽水
176 春の夜よ放―徒戸を推ス我不レ逢ハ　良明
177 我に売レ賤か藤―衣春―日経ル　貞雪
仝
178 けに心小草小菜つミ世を避ン　魚津　蘭夫
179 枯草の見へかくれけり春の水　奥州津軽　里桂」ウ
180 旧にしよ民たる宿の蛙のミ　元浦　亀選

181 或人曰、はせを五斗の瓢、門人以て鳴らす、
樗庵に瓢なし、何をか鳴さん。予曰、魏王の
瓢大なれとも五石のミ、先生の瓢万物精情を
おさめて混―々如たり、何か見さる処。
ひようたんの
なきをあるしの楽しミか
白猿洞主人」十六

附言　辛卯の夏、洛にまいり、おふ
けなく　上苑の大礼を拝し、
さらの西舟に中華紅毛の人を
見る。長崎に旅寝せし日、

182 秋たちぬ古―郷やきぬ濯クらん　樗庵
183 宰府菅廟に詣 神―寂や秋蟬我にいしはりす　仝
184 苅萱の関のあと あき霜の威や今さらにはつかなる　仝
185 〃　夜を魚の目あはじ蛙ゆゝ
しくハ　と人々に言捨て立出
しか、思へハ千々にひとつの
命得し心地す。記行ハ庵にの
こしぬ。
186 帰庵之吟 帰りけりほそりすゝきの細夜影　仝」ウ

187 師か長途をねぎらふ
春の人秋の事とて痩にけり　丙穴
188 秋の花つくしと答へ月云へり　蝶化
189 君―越し夜ハ何それの秋に似ん　杜乙
190 今日成て迎いさおし千里雁　里笑
191 帰ル山あやたつ秋の呉―服　驢堯
192 帰―鞍けふ偃すあらし北―高シ　東門」十七
193 卿―等遣ふ腸さらせ秋陽　南草
194 秋―美也酒―店に味鼾せむ　魚発
195 月おふちミいてや笠―捨杖投ん　烏暁
196 どびろくや前―垂の女の野―原うとふ　一水
197 秋此―日我にうるものひとつ哉　卓五
198 花すゝき凱―歌に月の声素タリ　可耕
199 事色―々秋のいろ〳〵と相咲し　我橋」ウ
200 いきたきを叩ク日のあり秋の腹　物赤

明和壬辰之春　　金城

四　安永二年刊逸題春帖

〔麦水歳旦帖〕

癸巳春初

嵐鶴公御まへにて

1　おのつから斐吹ひかし春の色　　樗庵

2　水ミとりならん犀川の音　　嵐鶴

歌仙畧之

3　汲屠ー蘇に齢知らるゝ元朝哉　　仝

4　雪添ふ簾児日を仰く春　　樗庵

歌仙畧之

5　きさらきの花雨に濯て色ー香有　　柯亭

6　山ー青ク二葉の枹鹿鳴ん　　華鳶

7　物朧たそ花ー見ン人雁帰ル　　鬼好

8　帰る雁帰れや稲葉いなにせじ　　寒川

「表紙

「見返し

「裏見返し

庵中吟

9　はつ音只心の対ふ是春か　　樗庵」ウ

春興

10　はるの色は何ものそ我を強す　　南草

11　追ふる世よあちきなき花駑馬の鞭　　物赤

12　人がらやさハ僞を蝶に見る　　蝶化

13　しもと結ふねりその原の春日ー陰　　斗入

14　世やさま〳〵花境ー涯を何に見む　　可耕

15　賢にそ女や舟ー狩らん春ー日潟　　杜一」二

16　一ー向に世を蒔ク老の桜麻　　驢堯

17　何ー所経てこやかけろふの生るほと　　里阡

18　学ひなハ柳こよなふ女や見てん　　立匊

19　世を人に清ー瀧聞かん春ー過よ　　宇暁

人間へ我意を吐ン

20　はせを植ッ春ー情是に直からむ　　魚発

摸二這ー裡一

21　山ー家女や独ー活提いてし珠数や町　　卓五」ウ

22　山桜かさし行人我ハ芋に　　女恵舞

23　日夕ー栄にえ人すたくむへ菫　　仝歌風

24　若菜野や今朝所ー以摘ン忍ふ草　　一水

25　幽ー棲や天ー晴白キ春の月　　北虹

26　うしと見し世を芽山ー葵の尺ー待ん　　芻路

27　帰る雁小ー波小魚の斐なさめ　　渡雪

28　我ハ斯ク花にそむける世に経るか　　涅町」三

あるにあらすなきにあらす

たゝ心の及ふ所を

29 飯章（イタコ）—挙の飯にあくよて哀—成ル　鯉堂
30 猫—恋ふ夜化（アダ）—寝む窓の意を知らめ　芭文
31 さもしげハ夕—春のくれ鷺の声　兎菊
32 我—世藤花たらハ何あたうたん　魚列
33 聞置かん此魚花に化ちる与　浣古
34 かたむきし花や故人をへつらへり　東門」ウ
35 ましら啼山やまさくら花の陰　一鴻
36 春の雨一—瓠に心ゆたねけり　夏候
37 蜘の圍の有たきまゝよ我—椿　二翠
38 露とほし我—世足ルかは夕—蛙　乙周
39 ふきの塔こや杜五郎か味なるか　里曲
40 鳥声—々我や花—候を何—吐ン　在武都　梨京
41 寸—草に霞—毀（ヤツレ）し春の野や　仝　夢楽」四
42 曙に物—問ふ顔かはつ花香　僧　蘭慮
43 残—雪やいく程なきを迫（セマ）り見し　蕙敷
44 硯石拾ふ汐干を土佐に有らん　僧　東化
45 指ス枝の翠なんそれそはつ霞　湖荻
46 はつ花の風情我—誰ソ何—嘗（ナメ）ン　丁々
47 鳥影の見ゆや蛙の身をひそむ　牛司

ゝ

48 夕—日哉求メて塚の花—打ン　花尺
49 しら波や何いわれなそ寄（コ）—居（ウ）—虫這（ナ）ふ　呉候
50 赤—馬に千里の花の果—乗らん　瓜云
51 鵜の羽影しらぬ小鮎の世や広キ　左行
52 鳶の目や計ル者世に春駕（ノ）らん　六童

53 あたなミやよその水音春夜—雨　女　梨黄
54 干—鱈々々月あらぬ日ハ花あかミ　二夕」五

白魚々々、汝カ皎々ノ潔を愛す。味イ淡—美、幸ニ切—磨ノ骨なく、老を養を悦フ。甜イ哉。同志ニあたへん。

55 歯—豁（アラハ）に我白魚に募る春　白猿洞　素椿
56 飼る汝蚕より只哀—也　東以
57 径（ミチ）—閉て枳—殻の花の花の色　水石

ゝ

58 花の中鄙（ヒナフリ）—風—俗めしも進ミしな　有貢
59 世や花の色ハ色てし我知らめ　市川
60 六—欲や拙キ得もの汐干潟　社藤」ウ
61 花心ひさこ一ッをさみすらん　尼　暫夢
62 雨そぼつ何に侍（ハ）へるそ鳴蛙　燕市
63 桜—咲キ被官秀意を争ハん　呂宙
64 朧—山や心おきなく欠—足—駄　我橋

ゝ

65 山風やむへ心—吹ク我さくら　素連
66 春老て風流（ヤサヲ）—男の眼江の蛙　女成」六
67 朝—花や心の兄と詠めける　ノ卿
68 乞—者日を花に臥意の春や得る　白良

春ヲ探ス

69 けふ暮し町山さくら見残リッ　白泉
70 春に出て何あしめなく野辺の駒　歌静
71 雉子鳴て身にまとひなん賤の袖　玉仙
72 鷹すへて野鳥春寝るあすの声　越鴻

73 東―風帰る我うたかたや鳥―朧　禹井　」ウ
74 牛引て春や蕨にうとふ声　女加実
75 さくら散ル錦の道や我情（コヽロ）　如蛙
76 都―出る才―士蛙の心かな　蛙卿
77 とまれ胡―蝶何世―貪るけふの風　白虹
78 花に恥よ日を貧―夫の桜（セコ）―売ル　其夕
79 僕（ヤツコラ）―等に酔るすゝめそ花の陰　虎蘭」七
80 誰寝ん予か暁を蝶―白し　枰鼯
81 春雨や潤ふ花のみそ咲ん　哿庁
82 惜かりし実ばへの桜刈―込ぬ　花夕
83 ちる花や雲に入鳥声立ぬ　女雨柳
84 さりとては鶯の声や荒―仕（シコト）―業　曹我
85 巣作るか蜂―鳴舘の鬼―瓦　霞駮
86 別レ霜これ而（ノ）―已（ミ）そいつしかに過ク　取水舎」ウ

ゝ

87 春日永し我―腹たゝく簟（ムシロ）哉　混夫
88 紛―々タル花廬山に近き牛―喰ふ　女清嵐
89 猿―廻し朝―風つらし布頭―巾　卯圭

ゝ

90 野―老穿ッ日鈍子泪―凝ル側ラに　東月庵留々
91 春―清キ細―江濁すや沢―潟堀　枝惜」八

ゝ

92 つゝし咲キ占（古カ）―猫隣―女に送る哉　十廾
93 白―魚や網の袋のぬめるめり　小々雄
94 春川や照る日ハ水の増リける　一化
95 春の夢かつらきの神なかくミむ　草遊
96 交らひや花に意気深ク山めくる　一俵
97 つかの間そ興せよ春の梅霞　柴桑居
98 岩つゝし岩間を走る黄鶺鴒　廬峰」ウ

ゝ

99 眉―柳骨―売ル市の翁哉　為鈍
100 花に酔フ人先ッ二日酒こわん　岱阝
101 古―戦歎歎目花楼（ナク）に衣―着ル　蒼梧
102 酒―債請（サカテコフ）―顔謠に小ふしあり野―款―冬　以文
103 永キ日を五―味に痩たる斷（ハクキ）哉　丸々

」九

春光

104 雁ハ行落花の雨よ我不レ死ナ　遍歴僧栗郭
105 野―風起ッ陽―炎籠ル馬さくり　長坂里山
106 花に問ふ彼―岸ハけふに定りぬ　仝鶯竹
107 何見てや中に背―中のほせ蛙　仝寄畝
108 浮―世かくあめれ蛙只―鳴あかす哉　宮腰琴市
109 取テざれハ蜆（シヽミ）に罪のかゝるへし　仝百丈」ウ
110 鶴―鳴や故―人の衣春を慰（イス）　松任去水
111 うくひすの鳴てや鬼女のおとろへる　仝白鳥
112 近―江路や桜―見に乗ル酒（サカテ）―銭舟　仝宜包
113 面―白キ朧や橋の人通リ　ツルキ左江
114 糸―遊やさたまる所へ行て見ん　仝芦船
115 高ク踏ンて柳見る日の何あらむ　柏野河巣
116 雨の翌（アス）見るもの多し春の色　仝麦風」十
117 梅か香をことふ美人そ侘しけれ　水島川芦

118 心多ク花さま〳〵に散果し　仝　梅視
〃
119 解(トク)ー氷リ東ー水千ー里斜なる　本吉　亀選
120 花くれて鬼ー畜に面を脱かせけん　蓬壺
121 春の月我を蛙の鳴ー夜哉　素仁
122 花の月有無を花にや放るこそ　夏静」ウ
123 早わらひを雨ー縣(アカタ)うる声清し　三谷
124 朝なけじめ何ー世なるてふ雨の狗(ク)ー杞(コ)　歌汀
125 早ー蕨や痩たる猿の春に酔　芦泉
126 雨ならむ狗ー杞の芽我に恵ミけり　雨兮
127 五ー加ー木暗ク世を洗ふのミ安かりな　古洗
128 藤の下(モト)に賤や夕ー部の齢ー知る　杜得
129 来るハ誰ソ昨ー日を恨ミ花盗ー人　文睡」十一
130 苗ー代の澄(スミ)ぬは世こそ安かりな　水門　和佼
131 春の色ハ我ー庭の梨子に限リしな　小松　三九
132 此ー朧花てふ父の姿にて　魚笋
133 弓ありて神の扉のさくら哉　桃方
134 人うれふこゝなる花の山桜　子皐
〃
那谷　三笑連
135 他(ヒト)の為に花見る顔そ哀ー也　姿仙」ウ
136 老海ー士の売らてやハ果ッ桜ー苔　池水
137 若菜野や賤しめかしき声ハあらじ　魚好
138 桃晩花老女の胸やしほむらん　僧如雲
〃
139 枯木ー樵ル音もこたふや春の色　山中僧　蘇月
140 山僧の松よ桃よと詠めけり　祖竹

141 桜有ル寮ハ簾おろす椽の先　芦雄」十二
142 無ー我の情自ー然の春か否ー蛙　大聖寺　武門　其翫
143 鍬の柄や眠る叟か牛に虻　谷川
144 梅しはし軋(キシ)る車に履(クツ)ー滑リ　春郊
〃
145 幟(キヌカサ)や松のわたりの朧くも　大聖寺　詩百
146 小鮎うく白北川よあやめなき　紫狐
147 置ー石に陽ー炎黄也日おしてる　友巴」ウ
148 梅折キ世を経し衣意そ安キ　不尤
149 世に不ー測なし盆のくわゐの動ク哉　加水
150 白ー□(白カ)や神人の夕部葩ー煎袋　柳下
151 我解レ官長者か芹に世渡らん　素帆
152 野ー七ー里誰そ梅の奴としら染む　八水
〃
153 桜咲人雲ー上の風ー情ある　越　安居　秋田坊」十三
154 陽に向ヒ老ー楽端ー山寝ても見ん　能　所口　南路
〃
155 鳴ものを聞かで鳥(トシハ)ー柴の仇雉ー子　越　滑川　良明
156 世に長者なきや春日に照られ臥ス　楽水
157 我去リて一ー日一ー□(廬カ)梅清めん　文身
158 春ー日又こゝろをためす斐ならむ　貞雪
159 我花に隣男となりつらん　越　府中　之丸」ウ
〃
160 大(ヲ、ソラ)ー虚や樗(アフチ)の香のどかに白し　丙穴
161 あしひきの猿百(ヲ)ー千春(チ)を鳴　可耕

162 今―日昔朧の君子かどふるに　物赤
163 世の節雨の月をよすらめ　南草
164 殿の部の秋をやすきにたそかれて　卓五
165 芙―蓉いつれの人か黒かる　斗入」十四
166 ウ伐レ柯ヲ恋の山さハ遠からし　杜一
167 ますらに妬キ鳥のひなび音　女恵舞
168 我か憑む常―陸の神の風―落て　蝶化
169 今そ琥―珀の暁を待得し　宇暁
170 御―トスル荷―先の茄―子若やかに　魚発
171 雨に其―角か名を唄ふなる　里阡
172 竟―涯ハ人に小―蓑のわたらひや　耕」ウ
173 夢此ころの馬―放ッ秋　穴
174 夜を鶴の寝られぬ思ひ月何―所　草
175 しは目を払ふ八十島に霧　五
176 新―羅行門―出にかさす花の黴　入
177 少―女ひとしく青―柳を弾ク　赤
178 二世かくれて壺の春―部の日を湛　舞
179 音なき空の星を語れる　一」十五
180 千―貫の価―醜おのこにて　暁
181 大―盞狭む雪の寒きに　化
182 葱与是傾―国の味ならん　阡
183 身を肆の日に偸ミ居る　発
184 我天―窓斯も長キと思ひきや　穴
185 小―鴉秋の桃―山をなき　耕
186 露にかす御―狩の□民―肥る　赤」ウ
187 大―社造りましく〳〵て月　草

樗庵社中

188 さゝ波やいないの鉾の降りし世に　五
189 白―子の太夫黒髪を寂フ　舞
190 ウ情―只なてしこの花を愛かしめ　一
191 舞―雩ニ風シテ詠テ帰ラン　入
192 ふりつゝミ蘇―防の縑あたらしく　化
193 古―都野―路いとふおもかけの春　暁」十六
194 已―去―来黒木を蠏の花かきや　発
195 囀りわびて唇ルを缺　鯉堂